私立大学の自主性

松山義則

安政五年に慶応義塾が開かれてから百十五年になる。日本の私学は、幕末から明治十年代にかけて数多く創設されたが、その創設は日本の近代化のほげしい流れのなかで、その当時における社会的必然であったと考えられる。昌平黉を継承した官制の東京大学に對峙して、それぞれの私学は經濟的自由を、あるいは政治的自由を、そして精神的自由を主張し、創立者は、自己の意図した精神を中軸として、おのおの特色ある自主性をかけて出発したのである。しかし、日本の私学はこの百年の歩みのなかで、ことに超國家主義的圧制のもとにその自主性を空洞化し、たんにその組織を守るにすぎなかったと戦後の歴史家によって痛烈な批判をうける時期をすごしたのである。しかしながら、私学を細々とまもりつづけた先人の苦渋をただ批難しおわることはできないと思う。

日本の私学は百年にわたる長い歴史を歩みつづけた。しかし同時に、ヨーロッパの古い伝統をもつ私立大学にくらべると、まだわずかに百年の過去をもつにすぎない底浅い歴史である。ことに、戦後の私学の状況は急激な社会的変化のもとで、急増する教育人口や社会的意識の変革のなかで、政府の教育政策の不調とあいまって、数多くの矛盾と問題をかかえたままではよこたわっている。将来社会において、私立大学がその存在をゆるされない時代がくるかもしれないし、あるいは国公立大学と共通の經營的地盤をもつ状況を生ずる

かもしれない。また、よく言われるように、英国の大学補助金委員会方式が採用されるかもしれない。いまここで即座に予断することはゆるされないが、私立大学の将来は決して樂觀できるものではない。

私立大学が国公立大学とことなる点は、いうまでもなくその自主性にある。教学の独自な特色を明瞭に表明することである。これなしにはその私学の存立理由はありえない。国や社会が自主的な私学の存立を容認し、振興することは、少数意見と多様性をみとめ、人類永年の学問の自由を保障することであり、その社会のもつ健全性の指針でもあるであろう。

教育がもともと自然発生的に親子間の接触から、個人的な人格的交流によって成立することはいうまでもない。また、学問の発展は一研究者の独自な学問的努力の積みかさねから生まれるのである。大学は、この教育と研究を基礎においた社会的機関である。運動体であると同時に組織体である私立大学も社会における教育・研究機関であり、組織体としても独特の自主性を堅持しなければならない。その自主性は、教学体制の組織のなかに具体的に表明され、現実化されねばならない。入試方針、カリキュラム、課外活動、就職活動あるいは教学のための管理組織などの諸活動のなかにその私学のもつ独自の特色が、現実化され、その私学の精神が具体的な型で表明されねばならないと思う。

私立大学がわが国の長い官尊民卑の風潮と東京大学を頂点においた学歴主義と能力主義のなかにおいて、自ら、私立大学が国公立大学への移管をまち、あるいはそれをモデルとしてそれへの接近と模倣を唯一の向上の道と考え、また、その補完物として一般大学化への方向を私学の将来であると考えるとすれば、そこには私立大学の存立理由も将来性も全くないと言わざるをえない。

しかし、私立大学の現実はどうであろうか。私学がその組織として自主性を表明するこ

とはまことに困難である。国家主義的教育統制のもとにおかれ、あるいは内部からする経営主義による自主的な教学の崩壊があり、また、競争する思想、信条からの自主性の否定があり、一般大学化への意図的促進がある。

私立大学における自主性の堅持は、それに共鳴し共感し、気概をもってする教職員を中核として、その私学のもつ独自の特色を希求して集る学生を選抜して、ともどもに切磋琢磨することにあるであろう。社会に出た卒業生との協力によってそれはさらに前進すると考えられる。いうまでもなく、私学が一企業内教育機関のような閉鎖的なものではなく公共のものである。しかし、その自主性を、序列性のつよい社会のなかで守りぬくことは、決して開かれた大学として、教育の機会均等原理や自由競争原理と抵触するものではないのである。

それぞれの私学がその特色を自由に發揮し、その自主性を維持することは、決して容易ではない。序列社会のもつ能力偏重のなかで、格差づけられた私立大学が、その創設者の立学の精神にこたえて、自由に闊達にその自主性を主張しなければならぬ。しかも、その効果は即効的にあらわれるものではない。教育、研究の評価は安直に社会に役立つかどうかによってきまるものではないからである。また一方、その主張が学問の自由の名のもとに独善と専制の座に安住することでもないであろう。私立大学は耐えて、その独自の自主性を組織のなかにきざぎざあげ努力をかさねてゆかねばならない。

(同志社大学長)